

10/17 Tue.

第632回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.632 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

ピアノ
Piano

ソプラノ
Soprano

メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano

バリトン
Baritone

バス
Bass

合唱
Chorus

合唱指揮
Chorusmaster

語り
Sprechstimme

コンサートマスター
Concertmaster

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

ルーカス・ゲニューシャス -p.7
LUKAS GENIUŠAS

アンナ・ガブラー -p.7
ANNA GABLER

クリスタ・マイヤー -p.8
CHRISTA MAYER

ディートリヒ・ヘンシェル -p.8
DIETRICH HENSCHEL

ファルク・シュトルックマン -p.9
FALK STRUCKMANN

新国立劇場合唱団 -p.9
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

富平恭平 -p.10
KYOHEI TOMIHIRA

黒田大介
DAISUKE KURODA

丸山泰司
YASUSHI MARUYAMA

岩本 識
SHIKI IWAMOTO

大木太郎
TARO ŌKI

真野郁夫
IKUO MANO

長原幸太
KOTA NAGAHARA

ヒンデミット
HINDEMITH

[休憩]
[Intermission]

アイスラー
EISLER

主題と変奏〈4つの気質〉 [約29分] -p.12
Theme and Variations "The Four Temperaments"

- I. 主題
- II. 第1変奏: 憂鬱質
- III. 第2変奏: 多血質
- IV. 第3変奏: 粘液質
- V. 第4変奏: 胆汁質

ドイツ交響曲 作品50 (日本初演) [約64分] -p.14
Deutsche Sinfonie, op. 50 (Japan Premiere)

- I. 前奏曲 Praeludium
- II. 強制収容所の闘士たち
An die Kämpfer in den Konzentrationslagern
- III. オーケストラのためのエチュード Etüde für Orchester
- IV. 回想 (ポツダム) Erinnerung (Potsdam)
- V. ゾンネンブルクで In Sonnenburg
- VI. オーケストラのための間奏曲 Intermezzo für Orchester
- VII. 鉛の棺に収められた扇動者の埋葬
Begräbnis des Hetzers im Zinksarg
- VIII. 農民カンタータ Bauernkantate
- IX. 労働者カンタータ Arbeiterkantate
- X. オーケストラのためのアレグロ Allegro für Orchester
- XI. エピローグ Epilog

字幕: 永井拓
字幕操作: Zimaku プラス

※当初発表した出演者を一部変更しております。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成:  文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (創造団体支援))
 独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人アフィニス文化財団 

助成: 公益財団法人花王 芸術・科学財団
公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団
公益財団法人ロームミュージックファンデーション
協力: アフラック生命保険株式会社

10/21 Sat.

第261回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.261 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

10/22 Sun.

第261回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.261 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano
コンサートマスター
Concertmaster

ベートーヴェン
BEETHOVEN

グリーグ
GRIEG

[休憩]
[Intermission]

ファリャ
FALLA

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

中川優芽花 -p.10
YUMEKA NAKAGAWA

加藤のぞみ -p.11
NOZOMI KATO

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

序曲〈レオノーレ〉第3番 作品72b [約14分] -p.19
Overture "Leonore" No. 3, op. 72b

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16 [約30分] -p.20
Piano Concerto in A minor, op. 16
I. Allegro molto moderato
II. Adagio - III. Allegro moderato molto e marcato

バレエ音楽〈三角帽子〉(全曲) [約34分] -p.21
"The Three-Cornered Hat" (Complete Ballet)
序奏
第1部 昼下がりー粉屋の女房の踊り(ファンダンゴ)ー
ぶどうの房
第2部 隣人たちの踊り(セギディーリャ)ー
粉屋の踊り(ファルーカ)ー代官の踊りー
終幕の踊り(ホタ)

10/27 Fri.

第666回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.666 / Suntory Hall 19:00

10/29 Sun.

第129回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.129 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Principal Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

プロコフィエフ
PROKOFIEV

[休憩]
[Intermission]

ハチャトゥリアン
KHACHATURIAN

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

宮田 大 -p.11
DAI MIYATA

長原幸太
KOTA NAGAHARA

交響的協奏曲 木短調 作品125 [約37分] -p.24
Symphony-Concerto in E minor, op. 125
I. Andante
II. Allegro giusto
III. Andante con moto - Allegretto - Allegro marcato

バレエ音楽〈ガイーヌ〉から抜粋 [約25分] -p.25
Excerpts from Ballet "Gayane"
ゴバックー剣の舞ーアイシャの踊りーバラの乙女の踊りー
子守歌ーレズギンカ

バレエ組曲〈火の鳥〉(1919年版) [約23分] -p.26
The Firebird Suite (1919 version)
I. 序奏
II. 火の鳥の踊り
III. 火の鳥のヴァリアシオン
IV. 王女たちのロンド
V. 魔王カステイの凶悪な踊り
VI. 子守歌
VII. 終曲

10/17
定期

10/21
土曜マチネー

10/22
日曜マチネー

10/27
名曲

10/29
横浜マチネー

Maestro

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

“私の使命”
〈ドイツ交響曲〉で
渾身のタクト!



旧東ドイツ出身のヴァイグレが、「演奏するのは自分の使命」と語るアイスラーの大作〈ドイツ交響曲〉を日本初演。このほかバレエ音楽を盛り込んだ二つのプログラムを指揮し、劇場指揮者として培ってきた手腕を発揮する。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年にはドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から今夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」にたびたび輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場でムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉を、バイエルン国立歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を指揮するなど、国際的な活躍が続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場で音楽総監督として最後の公演となるルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に出演したほか、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。コロナ禍には隔離期間を乗り越え、読響と充実した演奏を繰り広げ、ファンを魅了した。



©Irina Polyarnaya

ピアノ

ルーカス・ゲニューシャス

LUKAS GENIUŠAS, Piano

幅広いレパートリーと美しい声で世界を魅了する歌姫。〈魔弾の射手〉アガーテ、〈フィデリオ〉レオノーレ、〈さまよえるオランダ人〉ゼンタ、〈エレクトラ〉クリソテミス、〈サロメ〉表題役、シュレーカー〈烙印を押された人々〉カルロッタなどで、ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座、ドレスデン国立歌劇場、ケルン歌劇場などに出演。ティーレマン指揮の〈ワルキューレ〉オルトリンデでバイロイト音楽祭へ出演したほか、ガッティ、ユロフスキ、ジョルダンらの指揮でザルツブルク音楽祭、グラインドボーン音楽祭で歌うなど世界の檜舞台で活躍している。マーラー交響曲第8番〈千人の交響曲〉、R. シュトラウス〈4つの最後の歌〉なども歌っている。



©LuisSteinkellner

ソプラノ

アンナ・ガブラー

ANNA GABLER, Soprano

豊かな音楽性を誇るロシアの利器。1990年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院の教授であった祖母ゴルノスターエワから影響を受ける。2010年のショパン国際コンクールと15年のチャイコフスキー国際コンクールで第2位。プレトニョフ、スラットキン、ソヒエフらの指揮で、サンクトペテルブルク・フィル、フランス放送フィル、バーミンガム市響、フィラデルフィア管などと共演。ラ・ロック・ダントロン国際ピアノ音楽祭、ロッケンハウス音楽祭といった音楽祭にも定期的に招かれている。ベートーヴェンからヒンデミット、ジョン・アダムズまで幅広いレパートリーを得意とする。メロディア・レーベルなどからCDをリリースしており、ディアパゾン・ドール賞などを受賞。当初予定していた20年3月には来日できず、今回が読響初登場となる。

10/17
定期

Artist

10/17
定期

Artist



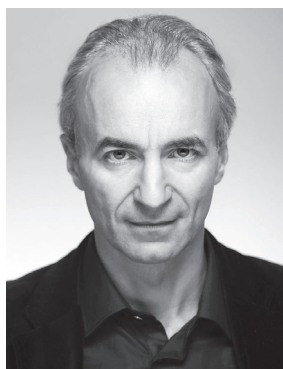
©Matthias Creutziger

メゾ・ソプラノ

クリスタ・マイヤーCHRISTA MAYER,
Mezzo Soprano

ドレスデン国立歌劇場から宮廷歌手の称号を授与されたドイツを代表する名歌手。〈ラインの黄金〉および〈ワルキューレ〉フリッカ、〈ファルスタッフ〉クイックリー夫人、〈サロメ〉ヘロディアス、〈画家マティス〉伯爵夫人など、アルトとコントラルトの役を中心としたレパートリーで世界を魅了。バイロイト音楽祭にもたびたび出演しており、〈さまよえるオランダ人〉マリー、〈トリスタンとイゾルデ〉ブランゲーネなどで好評を博す。メータ、シャイー、ヤノフスキら巨匠の指揮で、ウィーン国立歌劇場、ハンブルク歌劇場、ザルツブルク音楽祭など各地の歌劇場やコンサートにも出演。来年はミラノ・スカラ座にてティーレマン指揮〈ラインの黄金〉エルダを歌う。

フィッシャー＝ディースカウの後継者としてオペラ、ドイツ・リートで活躍する名バリトン。〈ドン・ジョヴァンニ〉表題役、〈タンホイザー〉ヴォルフラム、エネスコ〈エディプス王〉表題役など幅広いレパートリーで、ミュンヘン、アムステルダム、マドリード、パリなど欧州の主要歌劇場で活躍。ザルツブルク音楽祭、フィレンツェ5月音楽祭などに出演多数。今年2月にはフィレンツェ歌劇場にてブゾーニ〈ファウスト博士〉表題役を歌い絶賛された。ラトル、ティーレマン、ドホナーニ、カンブルランらの指揮で、コンサートでも活躍。ドイツ・リートではベートーヴェン、シューベルトから現代作品まで広く手がけ、アイスラー作品の録音も高い評価を得ている。読響とは、19年〈グレの歌〉で共演し好評を博した。



©Susanne Diesner

バリトン

ディートリヒ・ヘンシェル

DIETRICH HENSCHEL, Baritone



バス

ファルク・シュトルックマン

FALK STRUCKMANN, Bass

世界で活躍する現代最高峰のバス歌手。バレンボイム、ティーレマン、ムーティ、ベトレンコら巨匠と共演を重ね、ウィーン国立歌劇場とベルリン国立歌劇場の両劇場で宮廷歌手の称号を持つ。ベルリン国立歌劇場で〈ニーベルングの指環〉すべてのバス役で出演。〈さまよえるオランダ人〉表題役、〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉ハンス・ザックスなど、ワーグナーのドラマティックな役で数々の名舞台を築く。そのほか、〈オテロ〉イヤーゴ、〈トスカ〉スカルピアなど幅広いレパートリーを誇る。メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭など世界の檯舞台で歌い続けている。

合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。2007年以来、読響の〈第九〉公演に出演するほか、17年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年のブラームス〈ドイツ・レクイエム〉などで見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

10/17
定期

Artist



合唱指揮

富平恭平

KYOHEI TOMIHIRA,
Chorusmaster

東京都出身。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場等のオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティートルを務めた。これまでに、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ルル〉など、多数のオペラを手がけている。読響とは2017年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年の〈ドイツ・レクイエム〉などで新国立劇場合唱団の合唱指揮を務め、好評を博した。群馬響、東京シティ・フィル、東京フィル、東京響などにも客演。東京二期会音楽スタッフ、新国立劇場音楽スタッフなどを経て、19年4月に新国立劇場合唱指揮者に就任。洗足学園音楽大学非常勤講師。

10/21
土曜マチネー10/22
日曜マチネー

Artist

フレッシュな感性と深い音楽性を兼ね備えた22歳の新星。2001年デュッセルドルフ生まれ。ロンドンのパーセル音楽学校を経て、現在はワイマールのフランツ・リスト音楽大学にてグリゴリー・グロズマンのもとで研鑽を積んでいる。21年にはスイスの権威あるクララ・ハスキル国際コンクールで優勝し、聴衆賞なども併せて受賞。18年イエネ・タカーチ国際青少年コンクール、19年ロベルト・シューマン国際青少年コンクールのカテゴリーBで優勝するなど受賞歴多数。デュッセルドルフ響、ポルト・カーザ・ダ・ムジカ管、ホーフ響、イエナ・フィルなどと共演。マリンスキー国際ピアノ・フェスティバルに出演するなど、世界で活躍の場を広げている。読響初登場。



©Susanne Diesner

ピアノ

中川優芽花

YUMEKA NAKAGAWA, Piano



メゾ・ソプラノ

加藤のぞみ

NOZOMI KATO, Mezzo Soprano

バレンシアを拠点に欧米で活躍する新鋭メゾ・ソプラノ。東京芸術大学大学院首席修了後、パルマ国立アッリーゴ・ボーイト音楽院で学び、バレンシア歌劇場にて研鑽を積む。イタリア声楽コンコロソ・ミラノ大賞受賞。パルマ王立歌劇場〈結婚手形〉クラリーナでデビュー後、モデナ歌劇場〈清教徒〉エンリケッタ、ヴァッレ・ディトリア音楽祭ではルイーザ指揮〈コジ・ファン・トゥッテ〉ドラベッラを歌うほか、ロッシーニ〈スターバト・マーテル〉のソリストとしてナポリ・ロッシーニ管と共演するなど活躍。日本では、21年日生劇場〈カプレーティとモンテッキ〉ロメオで読響と初共演。23年7月には、米シンシナティ・オペラ〈蝶々夫人〉スズキを歌い好評を博した。二期会会員。

日本を代表するチェリストとして国際的に活躍する俊英。スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。2009年ロストロポーヴィチ国際コンクールで日本人として初めて優勝。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの支持が厚く、小澤征爾にも絶賛された。国内はもとより、パリ管、ロシア国立響など著名楽団と多数共演するほか、国際コンクールの審査員やロームミュージックセミナーの講師を務めるなど、若手の育成にも力を入れている。メディアでも「らら♪クラシック」「題名のない音楽会」などに出演。使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1698年製ストラディヴァリウス「シャモニー」。読響とは2010年の初登場以来数多く共演し、好評を博している。



チェロ

宮田 大

DAI MIYATA, Cello

10/21
土曜マチネー10/22
日曜マチネー

Artist

10/27
名曲10/29
横浜マチネー

Artist

ヒンデミット 主題と変奏〈4つの気質〉

「4つの気質」とは、人間の性質を体液のタイプによって4つに分ける、古代ギリシャに発する考え方である。本作は主題と4つの変奏からなるが、それぞれの変奏にはこの4つの気質がタイトルとして与えられている。

パウル・ヒンデミット（1895～1963）は第一次世界大戦後のドイツに現れた新世代のスターだった。20歳でフランクフルトの歌劇場のコンサートマスターに就任するとともに、作曲家としてもオスカー・ココシュカの台本による〈殺人者、女たちの希望〉をはじめ、表現主義オペラでセンセーションを巻き起こす。その後も乾いた感性で斬新な作品を発表し、新音楽の旗手としての地位を確立した。

1930年代に入ると、彼は社会における音楽のありように関心を寄せるようになり、作風もストラヴィンスキーやバルトークなど同世代の作曲家と同様に新古典主義へと傾いていくが、折から成立したナチ政権からは退廃芸術家の烙印を押されてしまう。ドイツを代表する音楽家とナチとの軋轢は、オペラ〈画家マティス〉の上演を巡って指揮者フルトヴェングラーらを巻き込む、いわゆる「ヒンデミット事件」へと発展し、作曲家はスイス、さらにアメリカへと移り住むのである。

〈4つの気質〉作曲のきっかけとなったのは、振付家のレオニード・マシーン（1896～1979）との協同作業である。マシーンとは聖フランチェスコをテーマとするジョットの絵画に想を得たバレエ〈気高き幻想〉で協同作業をしており、ヒンデミット自身の指揮による初演は大きな成功を収めた。〈画家マティス〉もそうだが、オールドマスター（18世紀以前に活動していたヨーロッパの優れた画家）の名画はこの時期のヒンデミットにたびたびインスピレーションを与えている。後続の作品を望んだマシーンは、ブリュッゲル（父）の絵画に基づき人間の気質をテーマにした作品を提案した。

ちょうどこの時期、アメリカの大学から教職ポストへの誘いがかかり、激しくなる一方のヨーロッパの戦火に、ヒンデミットはアメリカ亡命を決意する。新しい環境になじめず筆も滞っているうちに、マシーンとの関係が決裂する。結局、モンテカルロ・ロシア・バレエ団を離れてアメリカに渡り、ニューヨークでバレエ団を旗揚げしていたジョージ・バランシン（1904～83）の手に新作の計画は移る。ヒン

デミットはブリュッゲルの絵画を離れて自らシナリオを考え、ピアノと弦楽合奏による変奏曲を仕上げた。その内容は純音楽的であり、バレエ史においても特定のストーリーを持たない抽象的なバレエの先駆として評価されているので、あまり標題性にこだわる必要はないのかもしれない。

バランシンは1941年5月にこの舞台作品をニューヨークで初演する予定だったが、直前にアメリカ貨物船を護衛していた英国軍艦がドイツ軍に沈められ、敵国人であるヒンデミットへの風当たりも強くなったため、興行元が演目から外すという憂き目にあっている。結局、バランシン振り付けのバレエが初演されたのは戦後のことだった。

曲は主題に、それぞれの気質を表す4つの変奏が続く。熟達した書法、過度の感情移入を避ける乾いた叙情などに、ヒンデミットの特徴がうかがわれる。

最初の楽章となる**主題**は3部構成となっており、まずは弦楽器にテーマの第1部が歌い出される。ピアノが加わり急速な掛け合いとなる第2部を経て、やがてテンポが中庸に戻り、シチリアーノ風歌謡による第3部に移る。この3部構成は、後続の変奏でもおおむね保持される。**第1変奏「憂鬱質」**ではソロ・ヴァイオリンとピアノの緊迫した二重奏に始まり、弦楽器のみによる急速な中間部を経て、堂々とした行進曲に変わる。ワルツによる**第2変奏「多血質」**に続き、**第3変奏「粘液質」**では伴奏は弦楽四重奏に切り詰められ、ピアノと濃密な対話を繰り返す。 **第4変奏「胆汁質」**はエネルギーに始まり、スケルツォ風の間部を挟んで輝かしいフィナーレを迎える。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1940年／初演：1943年3月10日、ヴィンタートゥール、舞台初演：1946年11月20日、ニューヨーク／演奏時間：約29分
楽器編成／弦五部、独奏ピアノ

アイスラー

ドイツ交響曲 作品50 (日本初演)

2023年は、ハンス・アイスラー (1898～1962) の生誕125周年に当たる。クルト・ヴァイルやパウル・デッサウと並んで、劇作家・詩人のベルトルト・ブレヒトとともに活動し、その詩に多く付曲したアイスラーは、その実、彼らと決定的に異なったキャリアと創作スタイルを持っていた。ウィーンでアーノルト・シェーンベルクに個人的に師事し、無調や十二音技法による創作を間近で見ていたからである。同門のアルバン・ベルクやアントン・ウェーベルンが、シェーンベルクと歩みをともしながら無調や十二音技法を受け容れていったのに対し、1919年に師事したアイスラーはその直後に十二音技法の洗礼を受けた。それゆえ、兄弟子ふたりよりも客観的にこの技法と距離を取ることができた。兄弟子たちとは異なり、シェーンベルクと同じユダヤ人であったアイスラーだが、そうした「血」のつながりよりも、政治的立場や芸術観の違いを師との間に感じたアイスラーは、結局この師とは訣別してしまう。

アイスラーが求めたのは、シェーンベルクのような高度な専門性を持つ芸術作品ではなく、より民衆に近い世界であった。それは当時、現代音楽の置かれていた位置付け、すなわち難解な音楽作りによって聴衆から隔絶されていくことへの疑問から発しており、アイスラーに限らず、1920年代はさまざまな音楽家たちがシェーンベルク的な前衛や無調音楽からの方向転換を行っていた。アイスラーの場合、さらに共産党に入党し、より積極的に非エリートや労働者のための音楽を目指したという点が付け加わる。ソヴィエト連邦の樹立直後、アイスラーはいわば時代の子であった。

ジャズの要素などを用いて、形式面でもよりシンプルな音楽を書き始めたにせよ、アイスラーの作風はいわゆる大衆迎合的なものではなく、むしろ労働者たちのような社会の下層とシェーンベルクたちのような時代の先端とを架橋し、彼らのための新たな文化を創ろうとするものであった。芸術を社会的な学びの場として捉える立場はブレヒトと共通するが、それは一朝一夕には運ばないし、達成までには息の長い努力が必要だ。

しかしながら、時代は待っていてはくれなかった。そうした大衆に即座に取り入

るようにナチが^{たいとう}擡頭したからだ。1933年、ナチがドイツで政権を取ってから、共産主義者として追われる身となったアイスラーはヨーロッパを流浪したあげく、アメリカ合衆国に落ち着く。この時代の35年に書き始められ、アメリカ亡命後も書き続けられていた作品が〈ドイツ交響曲〉である。アイスラーは、ナチに^{むしば}蝕まれていくドイツに対し、ブレヒトの詩を用いて労働者の悲哀を描きながら、彼らに訴えかける作品を書こうとした。このとき、訣別したシェーンベルクが編み出し、またナチが拒絶した十二音技法が採り入れられる。そこにはナチへの反撥と同時に、この技法をエリートだけのものではなく、和声と非和声の緊張を生み出しながら、そのギリギリのところで大衆に訴えかけるものに鍛え上げようとする意図が見える。それはたしかに共産主義的な立場からの訴えかけではあったが、市民社会層も、続く労働者層も、ともに歴史的に^{ぜいじゃく}脆弱にしか形成されず、時代を大きく変えることができないという「ドイツのみじめさ」を意識し、それを大きな要因とするナチズムの擡頭を糾弾するような内容を持っている。

37年のパリ万博を機に開催された国際現代音楽協会の音楽祭に、アイスラーはブレヒトの詩を用いたふたつの楽章 (現在の第2、7楽章) を〈ドイツ交響曲 (あるいは反ヒトラー交響曲)〉の名で出品しようとしたが、これはナチの横槍で中止された (表向きには、合唱団が集まらないという理由であった)。アイスラーはこのあと、第6、10楽章のような器楽部分を加え、また第3楽章には1930～31年に書かれていた〈オーケストラ組曲第1番〉の終楽章を採り入れるなど、戦後までこの作品の創作は続いた。

戦後、1950年代に赤狩りでアメリカ合衆国を追われ、社会主義国であるドイツ民主共和国 (東ドイツ) に落ち着いて、その国歌まで創作するような「国家的作曲家」になったアイスラーであったが、作品はさほど多く演奏されることもなく、この〈ドイツ交響曲〉の初演の機会もなかなか訪れなかった。1959年によく初演がなかったとき、アイスラーは終楽章に、すでに〈戦争入門写真集〉としてブレヒトの詩に作曲していた曲をエピソードとして採用した。その詩を読むと、アイスラーにとって東ドイツもまだ「ドイツのみじめさ」を免れた国家ではなかったようだ。

第1楽章 ヴィオラによる旋律的な十二音音列でゆっくりと開始するこの「前奏曲」では、響きを厚くしながらの高揚のあと、テンポを速めてやや闘争的な部分を経たのちに、「おお、ドイツよ、蒼ざめた母よ」というブレヒトの詩が合唱とソプラノ独唱で歌われ始める。そして、再び高揚し、終盤近くにトランペットが高らかに〈インターナショナル〉の旋律を放ったのち、冒頭の弦楽が戻って静かに終わる。

第2楽章 メゾ・ソプラノ独唱、合唱を伴うパッサカリアであるが、低弦に現れる定型はD-C $\sharp$ -E-D $\sharp$ （すなわちB-A-C-H音型の移高形）を繰り返しており、クラリネットが始まる十二音音列による曲の展開とは無関係である。それはタイトルとテキストにある「強制収容所の闘士たち」のように、追い詰められても闘争を続ける執念を表している。惨殺されるがごとき突然の終止が印象的だ。

第3楽章 「オーケストラのためのエチュード」というタイトルを持つオーケストラだけの楽章。〈オーケストラ組曲第1番〉(1930)中の「聴取の熱心な練習」とされた終楽章を転用したもので、「アレグロ・エネルジコ」のリズミカルで闘争的な音楽である。中間に現れるトランペットの旋律は闘争歌「同胞よ、太陽を浴び、自由に向かえ」のデフォルメされた引用。

第4楽章 バリトン独唱、合唱による「回想（ポツダム）」という楽章。祖国という名のもとに戦死した者の棺の葬列に、それをデモとみなした警官たちが襲いかかる。葬送行進曲的な音楽が、中断されながら何度もくり返される。

第5楽章 メゾ・ソプラノ独唱、バリトン独唱が交替で歌う「ゾンネンブルクで」は、ゾンネンブルク強制収容所（現ポーランド）の過酷な状況がまさに過酷な音楽で描かれる。歌詞には「総統」が登場する。

第6楽章 オーケストラだけによる「間奏曲」。ヴィオラ独奏に始まり、木管、ヴァイオリン独奏という具合に、室内乐的に始まって、中央に急速な部分を挟む。

第7楽章 メゾ・ソプラノ独唱、バス独唱、合唱による「鉛の棺に収められた扇動者の埋葬」。独唱と合唱が対話をするように扇動者の死を劇的に嘆く。労働者の生活を向上させるために奔走する者は、「扇動者」として埋葬されてしまう。

第8楽章 「農民カンタータ」。「凶作」、「安全」、「嘆きの会話」、「農民の歌」とい

う4部分構成で、最初の2部分はバス独唱、合唱の交唱でリズミカルに進む。「嘆きの会話」はその名の通りメロドラマになっており、ハミングによる合唱を背景に、囁くような会話がなされる。「農民の歌」は行進曲調のバス独唱。前半3部分はイグナチオ・ジローネの小説『パンとぶどう酒』（1936）からのテキストをアイスラーが翻案したもの、「農民の歌」はブレヒトの戯曲による。

第9楽章 全曲中で最長の「労働者カンタータ」は、メゾ・ソプラノ独唱、バリトン独唱、そして続いて合唱が加わる交唱形式。できあがったワイマール共和国の矛盾が政治家の個人名を伴って語られていく。

第10楽章 「オーケストラのためのアレグロ」は、全体で2番目に長い楽章。ここでアイスラーは独自の十二音技法を存分に展開して、「ドイツの交響曲」の伝統に恥じぬ楽章を創り出している。

第11楽章 この短い「エピローグ」では、ソプラノ独唱と合唱によって、解決の見えない現状が歌われる。合唱による「彼らは寒いのだ」の絶唱と、すぐあとの「俺たちの息子たちを見てくれ」の秘めやかな語り口の対照には心が凍る思いがするだろう。

〈長木誠司 音楽評論家〉

作曲：1935～58年／初演：1959年4月24日、ベルリン／演奏時間：約64分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、シロフォン、ゴング、銅鑼）、弦五部、独唱（ソプラノ、メゾ・ソプラノ、バリトン、バス）、合唱

ベートーヴェン

序曲〈レオノーレ〉第3番 作品72b

10/21
土曜マチネー

10/22
日曜マチネー

Program Notes

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)が完成した唯一のオペラ〈フィデリオ〉(当初の題は〈レオノーレ〉)第2版のための序曲。オペラ自体は、1805年に第1版、1806年に第2版が初演されたが、不評に終わった。しかし1813年初演の〈ウェリントンの勝利〉で人気が急上昇したベートーヴェンは、それを機にさらなる改訂に着手。1814年に第3版＝決定版が初演され、今度は大成功を収めた。

ベートーヴェンは、当オペラのために四つの序曲を残した。内訳は、1805年の第1版用が〈レオノーレ〉第2番、1806年の第2版用が第2番を大幅に改訂した〈レオノーレ〉第3番、1814年の決定版用が全く別物の〈フィデリオ〉序曲で、死後に発見された〈レオノーレ〉第1番は「第1版用の不採用曲」として最初に置かれたものの、現在では「1807年ブラハ公演用に作られ、上演が実現せずに破棄された曲」とみられている。

全2幕の本編は、「スペイン・セビリヤ近くの刑務所に政治犯として投獄されている夫フロレスタンを、男装して牢番の部下となった果敢な妻フィデリオ(本名レオノーレ)が救出する」という、フランスの作家ブイイ原作の理想主義的な物語。この序曲は、本編全体を凝縮した交響詩的な音楽で、最終的には「長すぎる」等の理由でオペラから外された。しかしながら、大スケールの充実した内容から単独で演奏される機会はすこぶる多く、オペラ上演の際に挿入されるケースも少なくない。

曲は、第2幕のフロレスタンのアリア「人の世の美しき春にも」を用いた緊迫感漂うアダージョの序奏から、アレグロ、ハ長調の主部に移り、ヴァイオリンとチェロで提示される主題を中心に進行。危機を救う大臣の到着を告げるトランペットのファンファーレが離れた場所で2度鳴らされた後、弦楽器の数を増やしながら突入するプレストのコーダで輝かしい終結を迎える。

(柴田克彦 音楽ライター)

作曲：1806年／初演：1806年3月29日、ウィーン／演奏時間：約14分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、バンダ(トランペット)、弦五部

10/21
土曜マチネー

10/22
日曜マチネー

Program Notes

グリーグ

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

ノルウェーの国民楽派を代表する作曲家エドヴァルド・グリーグ（1843～1907）が残した唯一の協奏曲。シベリウスのヴァイオリン協奏曲と並ぶ、北欧の看板協奏曲でもある。

グリーグは1867年にソプラノ歌手ニーナと結婚し、68年には女兒を授かった。同年彼は妻子と共に妻の両親がいるデンマークのコペンハーゲンに行き、おもに郊外の夏の家でこの曲を作曲。翌69年4月に当地で初演され、熱狂的な喝采を浴びた。つまり本作は、25歳の若きグリーグが幸せの絶頂期に生み出した出世作である。しかし愛娘は1年後に亡くなってしまう。

グリーグは、15歳の年からライプツィヒに留学してドイツ・ロマン派の音楽を吸収し、18歳でピアニストとしてデビューした。また、その後デンマークで作曲家ノルドロークから民俗主義の影響を受けた。本作にはこうした経験がすべて生かされている。すなわち、ドイツで学んだ協奏曲の形式とロマンティックな音楽、祖国ノルウェーの民俗音楽、彼が得意としたピアノ音楽の要素が合体した作品である。

曲は、短調を基調としながらも明るさが漂う音楽。ピアノ・ソロには名人芸的な技巧が盛り込まれ、ノルウェーの厳しくも美しい自然を感じさせる点が独自の魅力をなしている。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート。ティンパニのロールの頂点でピアノが華麗に登場する出だしがインパクト大。その後は北欧風の第1主題と優美な第2主題を中心に、甘美さ、軽快さ、力強さが混じり合いながら進行する。**第2楽章** アダージョ。北欧の澄んだ空気感を湛えた長調の緩徐楽章。瞑想的な主題をもとに、夢見のような音楽が展開される。途中で華やかな部分も出現。切れ目なく第3楽章へ移る。**第3楽章** アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート。行進曲風の刻みで開始。活気溢れる主部に、フルートが奏するのどかな旋律が印象的な中間部が挟まれる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1868年／初演：1869年4月3日、コペンハーゲン／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ファリャ

バレエ音楽〈三角帽子〉（全曲）

近代スペインの大家マヌエル・デ・ファリャ（1876～1946）の代表作。1915年作のバレエ〈恋は魔術師〉の初演後、ファリャと同作の台本作家シエラは、アラルコン（1833～91）の小説「三角帽子」に拠るパントマイムを企画した。その創作途上の1916年、ロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフがバレエ音楽を依頼。ファリャはパントマイムのバレエ化を提案し、依頼者も了承した。先行作は1917年4月に初演されたが、オーケストラは小編成。そこでファリャは、大編成への改編や曲の追加等を行い、1919年に本作を完成。ロシア・バレエ団（装置と衣裳はピカソが担当）により初演され、大成功を収めた。

舞台は「聖ヨハネ祭の前日の午後、スペイン・アンダルシアの小さな村」で、大筋は「美しい粉屋の女房に手を出そうとする威張った代官が、粉屋らから散々な目に遭わされる」といった風刺まじりのコミカルな物語。代官がかぶる「三角帽子（3つの角を持った帽子）」は権力の象徴でもある。曲は、序奏と2部（2幕）で構成され、各部は基本的にひと続きで演奏される。スペイン舞曲を複数用いた音楽は、明るく情熱的で華やか。また、メゾ・ソプラノの独唱が2箇所に入る（バレエでは舞台裏で歌われる）点が異彩を放っている。

以下、各所にタイトルがあるが、実際はそれ以外の場面も含めながら移り行く形になっている。

序奏 ティンパニの強奏、トランペットとホルンのファンファーレ風の一節、カステネット、人々の「オレ！」の掛け声が続いて、独唱が「かわいいお嫁さん、門で扉をお閉めなさい。悪魔は眠っていても、起きて来るかもしれない」と民謡調で歌う。

〈**第1部**〉**昼下がり** 小川の傍の粉屋の家。昼下がりを表すやや緩やかな主題で始まる。粉屋がツグミに時間を教えこもうとするが上手いかず、女房がぶどうを食べさせながら教えると鳥はちゃんと鳴く……といった幸せな夫婦の様子が描かれる。そこに伊達男（ピッコロ）が登場し、彼をめぐる部分の後、堂々とした音楽で代官一行の行列が到来。代官は粉屋の女房に魅せられる。

再び昼下がりの主題が奏され、粉屋夫婦のやりとりの後、女房が残っていると、代官（ファゴット）が忍び寄ってくる。

10/21
土曜マチネー

10/22
日曜マチネー

Program Notes

10/21
土曜マチネー

10/22
日曜マチネー

Program Notes

粉屋の女房の踊り（ファンダンゴ） 女房が官能的に踊り、続いて代官が言い寄る。
ぶどうの房 女房がぶどうを持って代官をからかう軽快な舞曲が続いた後、代官はバランスを崩して床に倒れる。粉屋が戻り、夫婦で代官をからかう。巡査が現れる場面を挟んで楽しい舞曲が展開される。

〈第2部〉 隣人たちの踊り（セギディーリャ） 夜、人々が酒を飲みながら踊っている。
粉屋の踊り（ファルーカ） ホルンとイングリッシュ・ホルンのソロに続いて、粉屋が力強く踊る。踊りは次第に熱気を帯び、最後はテンポを速めて畳み込む。

するとベートーヴェンの〈運命〉交響曲の動機が鳴り、代官の衛兵たちが戸を叩く。彼らは代官の差し金で粉屋を連行。女房は悲しむ。そこで独唱が「夜カッコーが鳴く。所持持ちに門をしっかりとかけろと警告しながら。なぜなら悪魔は眠っていないから！ カッコー」と歌う。時計が9時を打ち、ツグミが真似る。

代官の踊り 代官（ファゴット）が忍び寄り、優美かつユーモラスに踊る。だが橋で足を踏み外し、大音響と共に水に落ちる。

粉屋の女房が出てきて、軽快な音楽で代官とやりとり。女房が逃げ出すと、代官は濡れた服を脱いで乾かし、夫婦のベッドにもぐり込む。

そこに衛兵から逃れた粉屋が戻り、干してある代官の服を見て女房を寝取られたと勘違い。おどけた音楽が流れる中、壁に「仇討ちで代官夫人を狙う」旨の言葉を書き、代官の服と三角帽子を身に付けて立ち去る。

終幕の踊り（ホタ） 出てきた代官は壁を見て仰天。やむなく粉屋の服を着て追いかける。そこへ衛兵たちが駆けつけ、代官を粉屋と間違えて打ち据える。女房と粉屋も戻って大混乱になるが、やがてすべてが明らかに。代官は赤恥をかく。ここは多彩な音楽が続き、皆が踊る快活な舞曲が盛大に盛り上がる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1916～19年／初演：1919年7月22日、ロンドン／演奏時間：約34分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、カスターネット、グロックンシュピール、シロフォン、銅鑼）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独奏メゾ・ソプラノ

10/27
名曲10/29
横浜マチネー

Program Notes

プロコフィエフ

交響的協奏曲 木短調 作品 125

セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）が最晩年に書いた交響的協奏曲は、名チェリストのムスティスラフ・ロストロポーヴィチとの出会いから生まれた。若き日のロストロポーヴィチの演奏に感銘を受けたプロコフィエフは、まず彼のためにチェロ・ソナタを作曲する。ロストロポーヴィチはソナタの初演を成功裏に終え、続いてプロコフィエフが1930年代に書いたチェロ協奏曲第1番のピアノ伴奏版を探し出してスヴァトスラフ・リヒテルと共演した。この協奏曲は初演の失敗以来、お蔵入りになっていた旧作であった。プロコフィエフはふたりの演奏に触発され、ロストロポーヴィチに「あなたの助けを借りてこの作品を書き直したい」と提案する。

こうしてチェロ協奏曲第1番は大幅に書き直されて、チェロ協奏曲第2番の名で生まれ変わり、後に交響的協奏曲の題に改められた。ロストロポーヴィチの回想によれば、プロコフィエフはロストロポーヴィチに曲の一節を作るように求めた。そこで曲を書いて提案すると、プロコフィエフはこれにささやかながらも決定的な変更を加えて「天才と凡人の間の決して越えられない隔たり」を見せつけたという。リヒテルが指揮を引き受けた初演では、客席にショスタコーヴィチも姿を見せ、作曲中だった自身のチェロ協奏曲第1番にひらめきを受けたと語っている。

第1楽章 アンダンテ チクタクと時を刻むかのような管弦楽に続き、独奏チェロが切迫感のある主題を奏でる。歪んだユーモアと詩情が渾然一体となっている。

第2楽章 アレグロ・ジュスト 全曲の半分近い長さを持つ長大な楽章。おどけた調子で始まるが、変化に富んだ楽想が次々と繰り出され、ムードは一貫しない。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート～アレグレット～アレグロ・マルカート 総奏の一撃に続き独奏チェロがノスタルジックな主題を奏で、これが変奏される。諧謔味をにじませるが、最後は緊迫感を高めて曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1951～52年／初演：1952年2月18日、モスクワ／演奏時間：約37分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン）、チェレスタ、弦五部、独奏チェロ

ハチャトゥリアン

バレエ音楽〈ガイヌ〉から “ゴバック” “剣の舞” “アイシャの踊り” “バラの乙女の踊り” “子守歌” “レズギンカ”

アラム・ハチャトゥリアン（1903～78）は現ジョージアのトビリシに生まれ、ソ連で活躍したアルメニア人作曲家。多民族が共生する故郷で幼少時から豊かな民族音楽に親しみ、独自の音楽的感性を育んだ。1963年には来日して読響を指揮している。

39年、ハチャトゥリアンはバレエ音楽〈幸福〉を作曲し、モスクワのボリショイ劇場での初演は大評判を呼んだ。その翌年、キーロフ劇場は〈幸福〉の改作をハチャトゥリアンに提案する。新たな台本が作られ、題は登場人物の名から〈ガイヌ〉と名付けられることになった。劇場は第二次世界大戦によりペルミに疎開しており、ハチャトゥリアンはこの街で「机とピアノのある小部屋で5か月間にわたり作曲を続け、ほとんど外に出なかった」という。作品は42年に初演されて大成功を収め、ハチャトゥリアンはソヴィエト連邦国家賞を受賞した。

物語の舞台はアルメニアの山村のコルホーズ（集団農場）。綿摘みの女性ガイヌは、怠け者で粗暴な夫ギコが密輸団と組んで悪事を働いていることに気づく。ガイヌの説得もむなしく、ギコは公金を盗んで国外に逃亡しようとするが、国境警察隊長カルサコフに阻止される。ガイヌはギコに刺されて重傷を負うが、カルサコフが献身的に看病し、やがてふたりは愛し合う。なお、57年にモスクワのボリショイ劇場で上演された際、台本が月並みな独身男女のロマンスに変更されたため、このバレエには2種の物語が存在する。上記はオリジナル版による。

“ゴバック”は歓喜の場面で踊られるウクライナの民族舞踊。いわゆるコサックダンス。“^{つるぎ}剣の舞”は初演前日に一夜で書いた曲だが、作曲者のトレードマークになった。“アイシャの踊り”は哀愁漂うワルツ。“バラの乙女の踊り”では朗らかな農場の少女たちが描かれる。“子守歌”はガイヌがわが子を寝かしつける場面。“レズギンカ”はコーカサス地方の民族舞曲。野性味にあふれ熱狂的。 〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1939～42年、1957年／初演：1942年12月9日、ペルミ／演奏時間：約25分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、フレームドラム、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、サスペンデッド・シンバル、チューバフォン、ゴング、銅鑼）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

10/27
名曲10/29
横浜マチネー

Program Notes

10/27
名曲

10/29
横浜マチネー

Program Notes

ストラヴィンスキー

バレエ組曲〈火の鳥〉（1919年版）

1909年、当時パリを席卷していたロシア・バレエ団を率いるディアギレフは、翌年のオペラ座公演のためにイゴール・ストラヴィンスキー（1882～1971）にバレエ〈火の鳥〉の作曲を委嘱した。ストラヴィンスキーはまだ20代の新進作曲家にすぎなかったが、すでに交響的幻想曲〈花火〉を聴いていたディアギレフはこの若い才能を抜擢することに決めた。ストラヴィンスキーは作曲の期限が定められていることや、大家たちと名を並べることに重圧を感じながらも、強い熱意をもって作品に取り組んだ。

バレエ〈火の鳥〉は初演から大きな成功を収め、ストラヴィンスキーは一躍時の人となった。コンサートでも上演できるようすぐに組曲（1911年版）が用意された。しかし、第一次世界大戦による混乱から、4管編成の大編成で書かれた〈火の鳥〉の演奏は困難になってしまう。そこで、ストラヴィンスキーは2管編成用ながらも高い演奏効果を持つ新たな組曲（1919年版）を作りあげた。後に1945年にも組曲が作られているが、現在もっともよく演奏されるのは、この1919年版である。

物語は複数のロシア民話を組み合わせで作られた。イワン王子は伝説の火の鳥を捕らえるが、不思議な力を持った羽根をもらうことと引きかえに火の鳥を逃がす。王子は魔王カスチェイに捕らわれていた王女と恋に落ちる。魔王は王子を石に変えようとするが、王子は火の鳥の力を借りて魔王を倒し、王女と結ばれる。

不吉な気配を漂わせる「序奏」で開始され、羽ばたくような「火の鳥の踊り」「火の鳥のヴァリアシオン」が続く。高雅な「王女たちのロンド」（ホロヴォード舞曲）、荒々しい「魔王カスチェイの凶悪な踊り」、優美な「子守歌」を経て、輝かしい「終曲」で曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1909～10年、1919年（組曲）／初演：1910年6月25日、パリ・オペラ座（バレエ）／演奏時間：約23分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部